

[9] 関連病院の施設紹介

施設紹介

独立行政法人国立病院機構七尾病院

1) 所在地

七尾南湾を望む県道1号線沿いの小高い丘の上に位置しています。新病棟の4階からは能登の風景がパノラマのように見渡すことができます。

2) 政策医療

国立病院機構の一員として当院が担う政策医療は結核医療、重症心身障害児（者）の療育と神経難病を含む慢性難治性疾患の医療です。結核の入院患者は年々漸減しており、20人弱になってきています。神経難病の入院患者数は現在約60人程度に増加してきています。

3) 病棟新築

2009年11月に新病棟が稼動しました。新病棟は4階建てで1階から3階は障害者病棟、4階は結核病棟をユニット化した病棟です。神経筋疾患患者は主に2・3階病棟に入院しています。

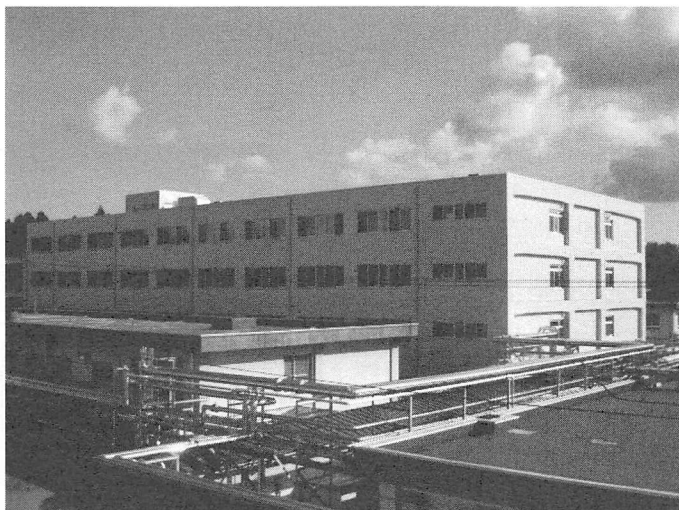
4) 広報誌

広報誌「ほほえみ」を年3回発行しています。中身はともかくとして表紙は当院OBのプロの写真家の作品です。ぜひホームページで御覧になってください。

5) 標準医師数

外来と入院の患者数から病院ごとに医療法上の標準医師数が計算されます。医師充足率が70%を切ると診療報酬が減額され病院経営は困難となります。過疎地域にある病院として当院も苦戦しており、末尾になりましたがご援助いただいている神経内科教室と教室員のかたがたに厚く御礼申し上げます。

(文責 横地)



独立行政法人国立病院機構医王病院

◇日本神経学会地方会主催

2009年10月31日に石川県地場産業振興センター本館で、第125回日本神経学会東海北陸地方会を開催しました（当番会長・駒井清暢）。当日は約180名の参加があり、二つの会場で活発な議論・意見交換が行われました。ランチョンセミナーでは、先端医学薬学研究センターの松成一朗先生から「MR/PETでみる老化・認知症」というタイトルでご講演いただき、興味深いお話をうかがうことができました。座長としても多くの同門の先生がたのご協力をいただき、おかげさまで、ほとんど予定どおりに会を終えることができました。反省点としては、ランチョンセミナーのお弁当が足りなかったこと・・・お手元にまわらなかった先生がた、大変失礼いたしました。最後にご協力いただいた多くの方々に感謝申し上げます。

◇CPCの定例化

2009年の病理解剖は11例であり、2008年の16例よりも減少しましたが、ひきつづき多数のご遺族のご理解を得られることができました。また、2008年11月から開始となったCPCも約2ヶ月に1度、2症例/回のペースで行うことができました。内臓器の病理については、金沢医療センターの川島先生に発表していただいています。中枢神経系の病理は、正直1回2症例は苦しかったのですが、4月から坂井先生にも担当していただくようになって、少し余裕ができました。また、大学入院時の主治医や、当院勤務から他病院に異動となられた先生にもプレゼンしていただいていますし、山田教授はじめ多数の先生方や、当院コメディカルのバックアップのもと、順調に開催することができております。マニアックな会ではありますが、あまり病理に親しみのない先生方も、毎回聞いていると、かなり耳学問になってきます。他院にご勤務の先生がたも、時間の許すかぎり、ぜひ、ご参加ください。

（文責 石田）



石川県立中央病院

当院は、多少の増減はあるものの常勤医師122名・研修医(1, 2年)22名程度、ベッド数662床、1日入院患者520-530人程度(平均稼働率80%強)の規模を有する、金沢大学・金沢医科大学病院につぐ県内最大規模の病院で、神経内科医3人体制で日々診療を行っています。両大学病院をはじめ、多くの病院が新病棟を建築した中で、当院は昭和51年に当地に移転され既に30年以上、ハード面でのやりくりもそろそろ限界といった感じです。

外来患者については、神経内科の希少性と病診連携を進めたこともあって紹介患者が多く、紹介率は院内でトップレベルにあります。少なくとも毎日数人~多い時は6-7人の新患が来られます。入院患者数は、10数人~30人程度と幅がありますが、脳血管障害が半数といったところでしょう。当院の使命として、救急患者を断らないことをモットーとしておりますが、24時間365日専門医療が要求されるこの御時世にあつては、急患の割合に対して3名体制というのは他科と比べると見劣りするの否めません。この点において、救急部門担当の先生の存在が大きく、的確な判断で紹介してくれておりますので、かなり助かっています。しかしながら、救急医不足は当院でも例外でなく、いつも綱渡りの運営状態ですので、この体制が続いてくれる確証はなくありません。旧体制に戻った場合、ちまたで言われている産科や小児科のように、当科も悪循環に陥る可能性は極めて高いように思われます。その場合、真っ先に脱落しそうなのが筆者ですが、現在在籍している松本・篠原両先生は、能力は男性医師以上にもかかわらず、女性ならではの物腰の柔らかさを備えており、筆者をはるかに凌駕するパフォーマンスをあげておりますので、その恩恵を受け、何とかやっているところです。

仲間を増やすことが最も有効な対策であり、コンスタントに研修医が入ってくる当院は、格好のリクルートチャンスではあります。日々の研修に際しては機嫌を損なわないよう注意を払い、積極的に学会発表などの機会を作ったり、少なくともローテーションの終わりには慰労会を企画し、などと何とか心証を良くして同じ道を選んでくれるよう努力をしているのですが、残念ながら未だ成果は得られておりません。古くて新しい問題の一つですが、妙案があったら是非お知らせ願いたいところです。

(文責 山口)

黒 部 市 民 病 院

病院の概要については、昨年度にこの年報に書きましたので、今回は当院のこの1年について振り返ってみたいと思います。

ひとつは、病院機能評価 Ver. 6 を受審したことです。2003年に Ver. 5 を受審して以来5年間が経過し、新たなバージョンになったことから受審することになりました。新しいバージョンの特徴のひとつはチーム医療を重視する、ということで、当院でも医師の指示、それをうけた看護師の記録、さらに支持が実行されたことを確認する、といったことがすべてカルテに記載されていなければならない、日々のカルテの記載量が増えたため、かなり負担を感じました。また、神経内科では多くが急性期脳梗塞の方であるため、急性期の不穏時にはやむなく身体抑制をすることがあります。身体抑制の同意書は作成してご家族に渡していますが、それだけでなく毎日抑制部位の状態を記録、また病棟スタッフと抑制の必要性について日々検討し継続が必要かを判断し、それぞれをカルテに記載することが必要で、これも日常業務の負担を増す要因になりました。最終結果は2010年1月に発表されますが、これらの努力の賜物か、最終講評では良い感触が得られたようです。

次に、病院改築のためのマスタープランが作成され、いよいよ建設に向けいろいろなプロジェクトが開始されるということです。当院は、病棟に関しては1996年～1998年にかけて東病棟と西病棟が新しく建てられましたが、管理棟および外来棟に関しては老朽化が進んで改築が必要な状態になっています。それに先立って、所長を兼務している併設の老人保健施設の移転・改築の計画もあり、これから施設のスタッフと新たな施設の建設に向け、いろいろと議論していかねばならないと思っています。病院の改築は、まだ数年先ということで、その時に自分がどうなっているかもわかりませんが、新たな病院への期待もふくらんできています。

臨床研修制度では、来年度も6名（定員6名）の研修医が当院で研修する予定になっています。来年3月には富山大学卒の研修医（2年目）が母校の神経内科への入局が決まり、金沢大学ではなかったのは残念ですが、新たな仲間が増えたと喜んでおります。これからも若い人から元気をもらいながら、また神経内科に興味を持ってもらえるよう指導して、一人でも多くの神経内科医が育ってくれたらと思っています。

（文責 新井）

富山市民病院

富山市民病院は、昭和20年8月1日の大空襲により、全富山市が壊滅した、その翌年の昭和21年2月に、富山市の保健衛生施設として、大手町に創設されました。その後、昭和29年に五福に分院が開設され、昭和58年に本・分院を統合して現在の新病院となっています。国道41号線沿いの交通の便が良い場所に立地しています。現在、病床数626床、23診療科を持つ地域中核総合病院として、市民の保健・医療・福祉を担っています。日本内科学会認定専門医教育病院、日本神経学会教育関連施設、日本脳卒中学会認定研修教育病院など、各種研修認定も受けています。

神経内科は、医師2人で、内科の1部門として診療に携わっています。外来は、毎日専門外来を開いています。内科一般業務として、脳ドック、日中救急、富山市輪番救急なども分担しています。病棟は、脳神経外科との混合病棟で、病床数は約20床+αです。脳血管障害が多く、脳神経外科と協力しながら、診療にあたっています。意識障害、頭痛、めまいなど救急外来からの呼び出しも多く、神経救急医としての役割も重要です。

(文責 林)



富山市民病院のホームページ <http://www.tch.toyama.toyama.jp/> も、ご参照下さい。

福 井 県 立 病 院

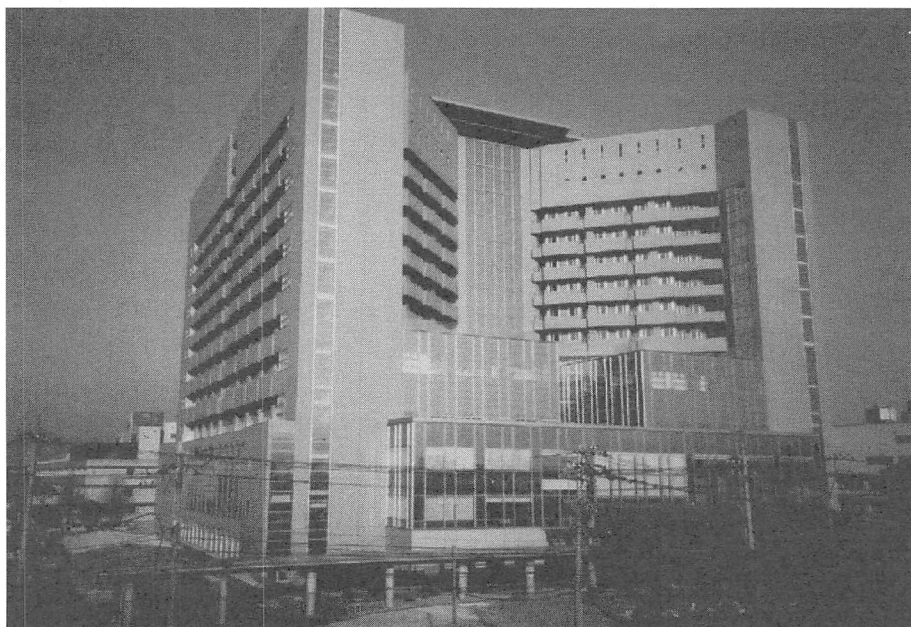
当院は 1082 床と県内最多の病床を有する福井の中核病院です。県立病院として政策医療を担う中、救急医療（県唯一の 3 次救命救急センター）、精神科医療（精神 400 床）、周産期医療（県唯一の NICU、MFICU）などが整備されています。

平成 16 年 5 月に新病院へ移転し、電子カルテを導入。5 年を経て少し傷みは出てきましたが、今のところは快適な環境の中で仕事をしています。平成 21 年によりやく立体駐車しも完成し、平成 23 年供用開始にむけ陽子線がん治療施設も建設が進んでいます。

平成 21 年度は山本新院長の就任、DPC 導入、がん医療センター開設、血液・腫瘍内科設置、がん専門外来・病棟設置とさまざまな変化がありました。神経内科の中でも大きな変化があり、長年科長を務められた宮地先生が転任され、3 年間おられた古川先生も大学へ移動されました。私が残り、室石先生、高橋先生を新たなスタッフに迎え新体制での平成 21 年度でした。宮地先生は現在福井市内の大滝病院で神経難病の診療に取り組んでおられます。宮地先生が去られたことは非常に大きな損失でしたが、強力な連携病院ができることになりました。我々スタッフ 3 人の神経内科臨床経験年数を合わせても宮地先生おひとりに及ばないのですが、皆の若さを武器に日々の臨床に取り組んでいます。

今後とも福井県立病院をよろしくお願い申し上げます。

（文責 濱田）



恵 寿 総 合 病 院

恵寿総合病院では、ほとんどの病棟の窓から七尾湾を眺めることができます。天気の良い日は日本海とは思えない程、青く澄みわたる空と海が広がり、スタッフも患者さんも病院にいたることがもったいないと思っているのかのようにそわそわしています。天気の悪い日は、空も海も灰色で覆われ境界線もわからず、皆もどことなく静かに過ごされています。能登の自然と一緒に歩んでいる病院なのだと感じます。

恵寿総合病院は全体で400床程度の中規模の病院です。神経内科は常勤1名で、非常勤2名の先生に外来の応援に来ていただいています。外来は脳神経外科（常勤3名、非常勤2名）の先生方と一緒に脳神経センターとして診療しています。七尾市内のみでなく、北は奥能登の珠洲から2時間かけて、南は羽咋からも患者さんが来られ能登の基幹病院なのだと感じます。外来患者数は1日20名前後であり、新患数は5～10名前後です。多くの方が頭痛、めまい、ふらつき、しびれ、物忘れなどの一般的な症状で来院されます。ただ、小脳変性症、サルコイドーシス、ベーチェット、ウィルソン病、難治性てんかんなど、様々な疾患の方も来院されています。能登の方は寛容で、2時間待ちになっても、ほとんど誰も怒り出したりしません。

入院は10名～25名と変動があります。多くは脳血管障害ですが、当院では脳梗塞患者さんも脳外科の先生方が一緒に診療して下さるので、感謝しています。特徴的なのは、当院は急性期病院ですが回復期リハビリ病棟があるため、急性期後すぐ転院という経過ではなく、リハビリ病棟で徐々にADLも改善して家に帰ることができるまでの経過を一緒にみることができることです。かなり重度の麻痺や高次機能障害を呈していても、2、3ヶ月コース、場合によっては4-6ヶ月コースで各職種、家族が協力しあって準備をしていけば、家に帰ることができるんだと感動したのを覚えています。スタッフが、皆気さくで仕事熱心で優秀な所も、ここの病院の財産だと思います。

(文責 佐村木)



[10] 金沢大学大学院脳老化・神経病態学（神経内科学） および金沢大学医学部附属病院神経内科名簿

（2009年1月から12月）

教授	山田正仁	
保健管理センター教授	吉川弘明	
准教授	岩佐和夫	
講師（医局長）	吉田光宏	
助教（外来医長）	柳瀬大亮	
助教（病棟医長）	小野賢二郎	
医員	古川裕	
医員	坂井健二	
医員	小松潤史	
医員・大学院博士課程	島啓介	
大学院博士課程	浜口歩	（3月修了）
大学院博士課程・国内留学	能登大介	（国立精神・神経センター）
大学院博士課程	池田芳久	
大学院博士課程	池田篤平	
大学院博士課程・心理士（研究員）	堂本千晶	
海外留学	浜口毅	（Tübingen 大学）
研修医	赤木明生	（2008年11月-1月）
研修医	古田拓也	（6月）
研修医	飯塚崇	（6-7月）
研修医	田中良男	（8月）
クリニカルクラークシップ	天野真也	（4-5月）
クリニカルクラークシップ	池辺美奈子	（5-6月）
クリニカルクラークシップ	南卓馬	（5-6月）
クリニカルクラークシップ	尾崎太郎	（6-7月）
名誉教授・非常勤講師	高守正治	
非常勤講師	垣塚彰	（京都大学教授）
臨床教授	駒井清暢	
臨床准教授	新田永俊	

臨床准教授	沖野 惣一	
臨床准教授	石田 千穂	
臨床講師	坂尻 顕一	
臨床講師	山口 和由	
臨床講師	松本 泰子	
臨床講師・診察協力医	高橋 和也	
診察協力医	小竹 泰子	
診察協力医・協力研究員	丸田 高広	
診察協力医・協力研究員	篠原 もえ子	
協力研究員	横地 英博	
協力研究員	廣畑 美枝	
協力研究員	森永 章義	
協力研究員	佐村木 美晴	
協力研究員	野崎 一朗	
協力研究員	本崎 裕子	
協力研究員	枝廣 茂樹	
大学院修士課程	高崎 純一	
薬学部大学院	吉川 弘毅	(3月修了)
薬学部大学院	高瀬 文超	(3月修了)
薬学部大学院	琢磨 寛孝	
薬学部大学院	中村 紗季	
薬学部大学院	佐藤 亜由子	
検査技師	山口 ゆかり	
検査技師	角田 由美子	
臨床心理士 (研究員)	柚木 颯憇	
心理士	本田 こず絵	
教授秘書	辻口 悦子	
事務員	中田 理砂	
事務員	澤田 和子	
事務員	米原 洋子	
外来受付	蔵谷 久美	

編集後記

2009年は、「新型インフルエンザ、政権交代」が、世の中で話題となっていました。新型インフルエンザは、ちょうど4月末にシアトルで開催された米国神経学会に行っている最中に、北米でも感染者が出始めたころでした。成田空港到着時、機内でヤコブ病の剖検でもするかのような防護服の検査官から、一台300万円の血税サーモグラフィ一攻撃を受けました。発熱者がいるとその後の対応に時間がかかるため、飛行機内はエアコン全開で寒いくらいでした。その効果のためか不明ですが、幸い発熱者がいなかったため2時間で解放されました。飛行機から降りる時になって漸くマスクを渡されました。この経験から、患者の検査・治療にあたる場合もしっかりエビデンスに基づいて診療を行うことが大切だと改めて痛感しました。

政権交代は、個人的には必要だと考えていたので、とりあえずは良かったのですが、国にお金がないということが明らかになり、このままばらまき政治を行っていると日本の財政破綻も近いと噂されています。医療にも研究にもお金がかかりますから、年報の業績のように日々結果を積み重ねて行く必要があります。

桃栗3年柿8年、石の上にも3年、医局長も3年という具合にはいかず、私は医局長4年目を務めさせていただくことになりました。4年目は、次期医局長へうまくバトンタッチできるように山田教授をはじめ皆さんと協力しつつ、当科の発展に微力ながらも貢献できればと考えています。

最後に、年報作成にあたり、各医長、各係の医員・大学院生、関連病院の先生方、事務の方々、そして最終校正にあたり山田教授、中田さん、辻口さんほか、ご尽力いただいた多くの方々に感謝いたします。また、業績の編集にあたり十分校閲いたしましたが、誤字脱字・掲載漏れなどあるかもしれません。これらの誤謬につきましては、この場をかりてお詫び申し上げます。

(医局長 吉田光宏)

金沢大学 神経内科 年報 第10号(2009)

2010年3月25日 発行

発行： 金沢大学大学院 医学系研究科 脳医科学専攻
脳病態医学講座 脳老化・神経病態学(神経内科)
〒920-8640 金沢市宝町13-1
TEL(076)265-2292 FAX(076)234-4253
<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~med19/>

印刷： 株式会社 メディカルアート
金沢市黒田1丁目33番地 TEL(076)269-4366
